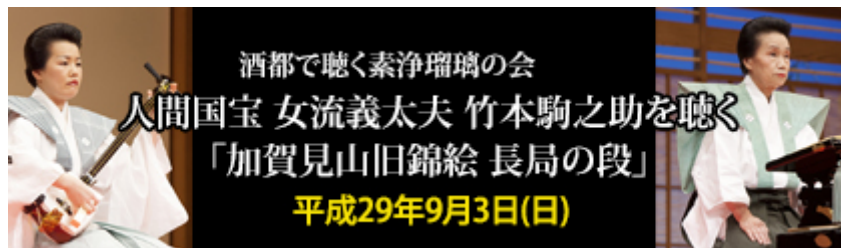


酒都で聴く素浄瑠璃の会 人間国宝 女義太夫 竹本駒之助を聴く「加賀見山旧錦絵 長局の段」



浄瑠璃:竹本駒之助

三味線:鶴澤津賀花

2017.9.3[日]

白鷹禄水苑 宮水ホール

14:30 開場 15:00 開演

白鷹禄水苑では、酒都・西宮から、能や文楽の催事を中心に、今に生きる伝統芸能を発信してゆこうという試みを続けてきましたが、このたび、人間国宝の竹本駒之助師をお招きし、初めて女流義太夫の会を開催する運びとなりました。

「女流義太夫」は、人形や役者をともなわない、浄瑠璃と三味線のみによる「素浄瑠璃」というかたちで継承されてきた芸能です。物語の進行だけではなく、すべての登場人物の心理状態や感情を一人で語り分ける義太夫節の語りは、幅広い音域や、さまざまな声を用い、極めて写實的に「情」を語ることが大切とされていますが、中でも女流義太夫は、視覚的要素がないということから、かえって語りの表現の探求が独自の進化を遂げたといわれています。この女流義太夫ならではの語りに磨きをかけ、あらゆる点において現在、男女を超えて最高峰の一人と称されるのが、竹本駒之助師匠です。今回取り上げた演目は、「女忠臣蔵」とも呼ばれる、女性による仇討ちものの名曲です。

なんといっても驚かされるのは、その豊かな声量に加え、細やかな人間描写に基づく表現力の素晴らしさです。本演目は、主人である中老・尾上の自害を目の当たりにした召使のお初が、その仇討ちを決意するまでの緊迫した展開が眼目となっていますが、その臨場感たるや、想像をはるかに超えたものでした。自害までに追い込まれた尾上の無念さ、主人に対するお初の忠義心だけにとどまらない切々とした情愛が細やかに表現され、本当に胸に迫る思いがしました。まるで映画でも見ているかのように目の前に物語が展開してゆく様は、まさに語りの至芸にふれる思いがしました。全身からほとばしり出るようなエネルギーと共に私たちに訴えかけてくる説得力は、技術の域を越えた、駒之助師匠の生き様そのもののよう感じられました。

駒之助師匠は長年にわたり吉田文雀師匠と御懇意で、以前東京で何度か文楽の共演もされています。そのうちの一つが今回取り上げた「加賀見山旧錦絵」だったということです。そもそも文雀師匠には、禄水苑で今年十回目となる「酒屋万来文楽」の立ち上げに多大なご尽力をいただき、以来毎年ご出演いただくとともに応援し続けてくださいました。惜しくも昨年ご逝去されましたが、文雀さんのお力添えなしには成立し得なかった酒屋万来文楽が十回目を迎える本年に、駒之助師匠をお招きできたのも、文雀さんのお引き合わせのように思えてなりません。



